

文献の精読にもとづく論理的対話・討論力の育成

社会科教育講座・松野尾 裕

1. 授業の概要

【授業の目的】今日の国際経済社会における最大のテーマは、「豊かな暮らし」と「貧しい暮らし」との著しいギャップであり、「貧困」問題の解決は、平和な社会を築くための最優先課題となっている。本授業の目的は、この問題に関する基本的文献の精読を通して、「貧困」についての理解を深めることである。

【到達目標】「貧困」と「開発」をめぐる問題の重要性を理解し、問題の把握とその解決へ向けての新たな取り組みについて、一定の認識を持つことが到達目標である。

【授業のキーワード】近代化と工業化(modernization and industrialization), 貧困と開発(poor and development), 経済学と倫理(economics and ethics)

【授業の内容】授業は基本的に文献精読を中心にして進める。その合間に適宜、テキストの内容に関連する事項の報告を受講者に求める。

<テキスト>

- (1) Amartya Sen, *Development as Freedom*, Alfred A. Knopf, New York, 1999. 石塚雅彦訳『自由と経済開発』日本経済新聞社, 2000年。
- (2) Amartya Sen, *Inequality Reexamined*, Oxford University Press, New York, 1992. 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討 潜在能力と自由』岩波書店, 1999年。
- (3) Martha C. Nussbaum, *Women and Human Development: The Capabilities Approach*, Cambridge University Press, Cambridge, 2000. 池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳『女性と人間開発 潜在能力アプローチ』岩波書店, 2005年。

<参考書>

- (1) Devaki Jain, *Women, Development, and the UN*, Indiana University Press, Bloomington, 2005.
- (2) UNDP, *Human Development Report 2003: Millennium Development Goals: A Compact among nations to end human poverty*, Oxford University Press, New York, 2003. 国連開発計画『人間開発報告書 ミレニアム開発目標(MDGs)

達成に向けて』古今書院, 2003年。

(3) 足立文彦『人間開発報告書を読む』古今書院, 2006年

(4) 鈴木興太郎・後藤玲子『アマルティア・セン 経済学と倫理学』改訂新版, 実教出版, 2002年。

(5) 絵所秀紀・山崎幸治『アマルティア・センの世界 経済学と開発研究の架橋』晃洋書房, 2004年。

2. 実施状況

【受講者】社会科教育専修1年次生3人

【開講曜日・時限】毎週水曜日4限

【教室】社会科図書室

【授業に当たっての注意】授業の開始に際し、上記のテキストおよび参考書を受講者に示して、授業の内容についての説明を丁寧に行った。受講者は必ずしも経済学を専攻しているわけではないので、授業のテーマと、これらテキストの学界動向の位置などについて概説する必要があった。

また受講者には、日頃から新聞等により経済・政治・福祉その他の社会情勢に関心を持ち、必要に応じて新聞記事の切り抜きの習慣を身に付けるべきことを述べた。

授業は全時間コロキウム形式(対話・討論式授業)で行った。受講者には、毎回のテキストの範囲にしたがって各自の問題の発見・整理・提起のために授業時間外にかなりの学習時間の確保を求めた。

【期末の評価】授業における発言・討論の姿勢とその内容にもとづいて評価した。当初期末にレポートの提出を求めることを予定していたが、授業中に提出された報告要旨をもってそれに代えた。

3. 授業改善のためのアンケート

【設問】

下記の設問について、①～⑤の中から選択してマークしてください。(①そう思わない ②ややそう思わない ③どちらともいえない ④ややそう思う ⑤そう思う)

- (1) この授業は、専修の目的や目標と適合していた。
- (2) この授業は、シラバスに沿って進められた。

- (3) この授業の内容・レベルは、あなたにとって適切だった (①やさしい ②やややさしい ③適切 ④やや難しい ⑤難しい)
- (4) この授業は、他の授業と関連していた。
- (5) この授業は、学生の意見が反映されていた。
- (6) この授業では、教員の話し方や説明はわかりやすかった。
- (7) この授業では、教材や学習資料が工夫されていた。
- (8) この授業では、意欲的に学習に取り組むことができた。
- (9) この授業では、無駄な時間が少なく展開がスムーズであった。
- (10) この授業は、何を学習しているのか、わかりやすかった。
- (11) この授業では、自分の考え方が培われ、得るところがあった。
- (12) この授業は、満足のいくものであった。

【回答】

	①	②	③	④	⑤
1				1	2
2					3
3			2	1	
4		1	1	1	
5			1		2
6			1		2
7			1	1	1
8					3
9					3
10					3
11					3
12					3

【考察】

問いの(3)～(7)について評価が分かれていることが目に付く。これらの設問は、授業の内容・レベル、他の授業と関連、学生の意見の反映の程度、教員の話し方や説明、および教材や学習資料の工夫について問うものである。

1. 授業の内容とレベルについては、受講者の興味や学力を考慮することは必要であるとしても、大学院における授業として一般的に見て妥当な水準を確保することは当然であると考えている。したがって学部段階で経済学の基礎的科目（経済理論・経済史・現代経済分析）を受講し、その内容を理解しているということを前提とせ

ざるを得ない。それらの知識が不十分であると判断される受講者については、適宜参考書等により補習することが求められる。

2. 他の授業との関連では、授業中に特に社会学および倫理学との関連に注意するよう促した。そのことは、本年度に開講されているそれらの科目の内容が直接的に本授業と関連するものだとすることを意味しない。そうではなく、それら科目の教員に対して本授業で学んでいることを話題にすれば、必ず有意義なコメントをもらうことができるであろうということである。

3. 授業の進め方、テキストの扱い方、発表者・討論者の選定などについて、学生の意見は毎回の授業において時間をとって把握しようと努めているのだが、不十分だという思いも一部にあることがわかる。意見が出しにくいというところがあるとすれば改善したい。

4. 教員の話し方や説明については、できる限り丁寧であることを心がけているが、わかりにくさが残っているようだ。ただし授業中の限られた時間のなかでの説明であるので、当然、不足の箇所は参考書等で補うことを指示することになる。

5. 教材・資料についてはどうしても文献中心にならざるを得ない。外国語の文献については、日本語訳のあるものは日本語訳をテキストとするが、原書を参照する学習習慣を身に付けるよう指導している。実際、受講者は原書との対照により訳書に1箇所誤りを発見することがあった。

4. まとめ

大学院の授業改善は、全般的にまだ不十分であり、今後本格的に取り組まれるべき課題である。大学院の授業は伝統的に文献講読を中心に行われてきた（私自身もそうした形で訓練を受けた）、一次文献の精読、参考文献の渉猟、論文作成という研究作業のスタイルは変わらないにしても、今の大学院生に特に求めたいことは、文献の徹底した精読にもとづく論理的対話・討論力を身に付けることである。不確かな読みであいまいな理解のままに議論をしようとしても、それではだめだ。